



●雲の上

●皇后陛下の御養蠶 皇后陛下には例年御手づから養蠶に従事せさせ給ふ御事なるが、本年も昨今その事に努かせ給ふ由、又各地とも本年は降霜のため桑の被害少からぬ申聞召され、香川太夫に仰あり被害の模様内奏に及ぶべき旨、各地方官に御沙汰ありし由、承はる。

●東宮御巡遊 皇太子殿下には御見學の爲め愈よ去月廿日御出發相成りたるが順次左の各縣下御巡行あらせらるゝよし。

- 群馬 ○長野 ○新潟 ○福島 ○山形 ○慶手
- 青森 ○秋田 ○宮城 ○茨城

●學事集會

●女子高等師範學校 附屬高等女學校は先月四日高等師範學校運動場に於て春期運動會を開きしが、同附屬小學校は十二日大久保にて運動會を開きたり▲十日には本校通學生一同大森八景園に遠

●皇太子妃殿下御着帶式 彌よ先月十五日御舉行相成れり、宮中にては午前九時賢所大前にて奉告祭を行はせられ、東宮御代拜丸尾侍従、妃殿下御代拜吉見女官の參拜あり、十時よりは東宮御所に九條公、及鷹司公夫妻、侍醫等參殿し吉例により鷹司公夫妻より妃殿下に御着帶を參らせ、御産婆之を受けて妃殿下の御身に着け奉つり、之にて御式濟み、皇太子殿下は更に表御殿に出御あらせられ參列の各員へ御祝酒を賜はりし由泄れ承はりぬ。

足會を催うしたりとの事▲廿八日地久節には午後六時より本校講堂に於て生徒一同の祝賀會を開き面白餘興談話等ありて中々の盛會なりし由▲久しく本校國語科教授として碩學の譽高かりし三輪義方氏は客月十一日病氣の爲め遂に逝去せられたり誠に痛惜の至りといふべし。

●日本女子大學校 同校現下在學生徒數及府縣別は次表の如し。(五月十五日現在)

府縣	東京	京都	大阪	神奈川	兵庫	長崎	新潟	埼玉	群馬
部	大學	英文	豫科	英文	英文	英文	英文	英文	英文
校	女學	女學	女學	女學	女學	女學	女學	女學	女學
合計	一八二	一五七	一四九	一三三	一三〇	一〇九	一〇二	九〇	七二
府縣	千葉	茨城	栃木	奈良	三重	愛知	静岡	山梨	滋賀
部	大學	英文	英文	英文	英文	英文	英文	英文	英文
校	女學	女學	女學	女學	女學	女學	女學	女學	女學
合計	一〇〇	九二	八二	七二	六五	五五	四三	三三	二二

附記	沖繩縣は入學生なし
廣島	七〇
岡山	二二
鳥根	二〇
鳥取	一〇
富山	一〇
石川	一〇
福井	一〇
秋田	一〇
山形	一〇
青森	一〇
岩手	一〇
福島	一〇
宮城	一〇
長野	一〇
岐阜	一〇
山梨	一〇
山和歌山	一〇
徳島	一〇
香川	一〇
愛媛	一〇
高知	一〇
福岡	一〇
大分	一〇
佐賀	一〇
熊本	一〇
鹿兒島	一〇
北海道	一〇
合計	一〇〇

●華族女學校 先月十三日全校第十回運動會を全校内に開きしが、當日は 皇后陛下御行啓あらせられ、始より終まで一々御観覽あらせられし由。

●第一高等女學校 是全じく十八日、大森に遠

足を試み、そこにて運動會を開きし由。

●高等女學校校長會議の議決 過般來開會中なり

し同會議に於ての議決事項左の如し。

- 一 教員欠勤の場合に講話復習練習等をなし教員出席の場合 填補を爲し長期欠勤の場合に學科目に照下臨時教師雇入又は合級の教授を爲す事
- 一 作法を實際に適切ならしめんが爲め實物につき實習せしめ又は生徒實行を監視し來賓の接待送迎挨拶配膳給仕を爲さしむる事
- 一 學校と家庭との連絡を親密にせしめんが爲め父母懇話會を開き式日又は會合に父兄を招待し學校家庭の通信をなす事
- 一 教授上可成變休假名を廢する事
- 一 補習科に於て小學校教員たるの豫修を爲さしむるの不可なる事
- 一 修身の科中に於て操行點を付し又は別に操行點を定め之を進級の條件中に加ふるの不可なる事
- 一 高等女學校令施行規則二十五條中「修身の下に」裁縫を加ふる事及第同三十三條中「修身」の下に「國語、外國語を加へ」地理の下に「數學」を加ふる事並に高等女學校寄宿會

に於て厨房を設くるの規定を加ふる事、同上に作法の特別教室を加ふる事、同上施行規則は中學校令施行規則を準用せざる事

- 一 技藝専修科入學資格は高等小學校二ヶ年の課程を卒りたるもの以上にて定むる事
- 一 高等女學校寄宿舎の構造は小規模を爲し一棟の人員を五十人以下とし之を二部に別つ事

●音樂會 先月四日には午後二時より小石川酒

井邸に於て、明治音樂園遊會を開きしが、軍樂隊の演奏、歐洲管弦樂數曲、及狂言等數番あり、

折柄の好天氣にて中々の盛會なりき▲同五日には午後六時より九段階行社にて千代田音樂會の催う

しあり、當日第一の呼びものとなりしは、目下横濱なる獨乙婦人カイゼル嬢の獨唱なりき▲全十七

日には午後二時より東京音樂學校に於て、岡山孤兒院慈善音樂會を催うせり、ケーベル、ユンケル、

ハイドリツヒ、幸田、橘等音樂學校の諸名手の演

奏あり近來稀なる盛會なりし由▲因に記す 先月六日には、皇后陛下、特に音樂學校に御行啓あらせられ、同校生徒及職員の演奏を御聞きに相なられたる由。

●女子の友誌友會 第二回同會を先月十二日開花樓に開き、演舌、福引、寫眞撮影、大神樂、等ありて、中々の盛會なりし由。

●女子職業學校展覽會 共立女子職業學校にては豫記の如く過日午前八時より生徒試業の狀態、製作品の陳列販賣を爲せしが來會者は菊池文相をはじめ續々踵を接し裁縫、造花、編物、圖畫、刺繡の各教室を順次觀覽終て作品展覽場に入る順序にて此の場には各科通じて見るべきの品數なからむ。

●東京府教育品展覽會 先月十八日より本月三

日まで上野公園第五號館内に開會卅日には長くも皇后陛下の行啓を辱うせり、出品總數は二萬に餘り、其中小學校生徒の裁縫成績品最多數なりしが如し。日曜土曜は見物人中々の雑沓を極めたり。

●筆の雫

●癩病患者百萬人 其筋の最近調査に據れば全國各府縣下に於ける現在癩病患者の概數は凡そ四萬人餘の多きに達し、之が系統を有する人口は少くとも九十萬餘に上り居り、近年益増加の傾向を呈し、熊本縣下の清正公を祭れる祠の附近部落或は、東京府荏原郡の大井村の如き、全部落癩病患者のみにて、各府縣下孰れの地方にも斯る二三の小部落ありて其病毒を傳播せしめ居れるの現況なるより内務省衛生局に於ても今後相當の取締法を設くることに決し何れ中央衛生會議に諮問の上

發布する見込みなりといふ。

●獨逸に於ける離婚と自殺との關係 普魯西に

於ける離婚の結果に關する統計に據れば或る人數の内夫に別れ又は離婚せられたる女にして自殺を企てたるもの三百四十八人あり、之に對し現に人の妻たるものにして自殺を企てたるものは僅に六十一人に過ぎず、男子中には其比例之よりも大にして、妻に別れ又は離婚せられたる男子にして自殺を企てたるものは二千八百三十四人あるに對し有妻者にして自殺を企てたるものは二百八十六人に過ぎずと云ふ。

●目を休むる簡法 佛國の某著作家は近頃過度

の書きのにも爲め目が疲勞して朦朧となりたる時極めて派手な色の絹布を暫く凝視すれば能く目を休め視力を回復し得ることを偶然發明し、數回實

験の上右の絹布をインキ壺に巻き附け置き、ペン尖にインキを附る毎に此絹布を見ることになしたりと云ふ。

●百歳の花婿、九十三歳の花嫁 去三月歐洲ボ

ヘミアのオーベルポリツツに於て珍しき結婚ありたり、新郎のフランツ、ロスネルは百歳にして臨終の際襟に在り、九十三歳の新婦アンナ、レンチルと結婚したるなり、此男女は七十五年間互ひに戀慕したる仲なりしが故障ありて今日まで結婚する能はざりしものにて結婚後四十八時間を経て新郎は死去したる由。

●印度のペスト 印度に於けるペスト病は目下

頗る猖獗を極め居る由にて孟買領事より其筋への報告に依れば四月七日より同十五日に至る一週間印度全國に於けるペスト病死亡者數は二萬五千六

百五十五人にして、漸次其數を増加しつゝ、わりと云ふ。

●米國大統領と日本の柔術 吾國の柔術が次第

に外人間に傳へられつゝ、あることは世人の熟知せる所なるが、今や米國大統領ルーゾヴェルト氏も吾柔術を學びつゝ、ある人の一人に數へらるゝに至れり、氏は運動の爲に之を始めたる由なるが、其教師は曾て長崎警察署の雇たりしオブライエンなり、同氏は我國に滯留中柔術を學び歸國後米人間に此術を擴むるに務め居れるなり、大統領は氏に就きて毎日二回柔術の稽古を受くるなりと云ふ。

●動物虐待問題 動物を虐待することが泰西諸

國に於て如何なる程度まで罪惡として認めらるゝかを示すに好き一例は過般倫敦に於て一動物商人が金魚を虐待したる廉に依り、罰金二十圓を課せ

られ訴訟費用二十二圓を負擔せしめられたることなり、同人は多くの金魚を十三個の硝子鉢に入れ店みせの窓まどに吊つるしたる儘ままイースターの祭日に店を閉ぢて旅行し、其間に許多の金魚の死し居たるを動物虐待禁止會員に見出されて告訴せられ、此處罰を受くるに至りたるなりと云ふ。尙去月中新嘉坡に於て動物の虐待したる廉に依り、罰金を課せられたるもの、總額は、凡そ五百弗なりと云ふ。

●火山爆發の慘害 先月西印度島に於ける火山

爆發の慘害に付きては、乞ふ次の電報に見よ。

●火塊散落全市破壊 (十日倫敦ルートル發)

マリチニヤの噴火山爆發の爲めサンピエール市は破壊されたり。佛國巡洋艦スシエルの指揮官は報じて曰く、五月八日の朝山の如き火塊ハードアー市に落下し同市全体を烏有に歸したり、此天災を

免れたるは同市人口二萬の内僅に三十名と商港の  
みなり、又セント、ドミニカ並にセント、ヴキン  
セントに於ても火山爆發しつゝあり、西班牙及南  
部佛蘭西に於ては地震頻なり。

●サ市の惨状餘聞 (十三日同上發)

去日曜日(十三日)に有志者サン、ビユールの荒趾を巡檢し  
たるに、マルチニーク島は濃煙を以て蔽れ其近海  
には船舶の破片漂流し海鷗、鯨族は争ふて水面に  
漂ふ惨死者死体を啄喰し居たり、又熱風寒風交る  
交る吹荒み、雨さへ降頻りたり、サン、ビユール  
市の火事は其時尚は燃えつゝありて上陸は甚だ困  
難なりき、市街は殆んど其趾を止めず、累々たる  
死体は多く其面を下向きにし横はり居たり。  
嗚呼何等悲酸の報ぞ、米國議會は此報に接して即  
時に二十萬弗施與の件を議決して以て被害者救助

の資に供せりといふ。

東京より

多忙に取り紛ざれと申しては、相すみ申さず候  
へ共一回通信を怠り候罪は、偏へに御ゆるし下さ  
れたく候。さても雨勝ちなりし五月の月も打過ぎ  
候へばはや入梅の時期に近づき申候。只今の處、  
當地は何の眺めも之なく、紅深き岩躑躅や、ゆか  
りの色の藤の花も疾く、先月の半ば頃散り失せ候  
て、郊外見渡す限り、青葉のみの景色に候、たゞ  
此間に堀切りの菖蒲許り時を得顔に咲き誇り候も  
心憎き心地致され候御地の有様はた如何に候や。  
▲兎角に四月、五月といふ月は種々の會の有之候  
月にて中々賑やかに候。學校長會議などは既に新  
聞紙にて御承知の事と存候。東京府教育品展覽會

も、思ひの外繁昌致し候由にて、先月二十五日の

日曜日には來觀者の數一万人に餘り候由に御座候

▲近來の出版界こそ可笑しく候様覺し召さず候哉

出るものゝ大低女とか戀とかに關係したるもの

多きには呆れ申候。「戀の伊藤博文」とか、「愛しき

妻」とか「男と女」とか「婦人の側面觀」とか、

「女より見たる男」とか、其ほか「戀」とか「有美

臭」とか、曰く何曰く何、よくも戀愛文學(?)の揃

ひも揃つて出版せらるゝものに候はずや。之に依

りて以て、當世の風潮は大低御推察相なり度候。

或人小生の此種の文學を嘲笑致し候を咎めて「さ

はいへ、ゲーテのエルテルス、ライデンは如何」

と申され候へ共、エルテルス、ライデンを以て、

當世の所謂戀愛文學に比較致され候ては、此大文

豪定めて、地下に哭せらるゝ事と存じ候。

▲近頃の怪聞なりし高等女學校國語讀本問題も、

一先づ落着致し候趣承知致し候、千葉縣高等女學

校々長の今回休職に相なり候も、之が爲の由に候

▲讀賣新聞に連載せられし明治の令嬢も、はや完

結致し候。學徳共に高き當世の女學校生徒女教師

等を紹介致さるゝは無論宜しく候へども、左もな

き人を餘りに賞め過ぎて候とか、令嬢たちの親々

から態々新聞社へ頼みに行きて候とか、何とか平

とかと、口善惡なき京童は申し傳へ居りし事に

御座候。

▲追々夏休みに近つし候に付いては、又々講修會

のいろゝ廣告有之候、來月にも相なり候はゞ取

り纏め御覽に入れ可申候。先は之にて摺筆仕るべ

く向暑の折柄折角御自重專一に存じ候 草々



●北海道廳立高等女學校長 同學校長は札幌女子高等小學校長たりし小林到氏任命せられたり、

月俸金六十五圓。

●奥羽六縣北海道聯合教育大會 同會は來る六月六日より三日間、札幌區北海道教育會に於て開

會の由にて目下準備中にあり。

●夏季講習會講師 本年函館教育協會に於て開

會すへ講習會講師には、各科教授法を現任女子

高等師範學校教授榎山榮次氏に、倫理科を東都藤

井文學士に、法制科を秋保法學士に何つれも決定

せる由、因に記す北海道教育會倫理科講師は井上

哲次郎氏なりと、本道講習會の盛運こそ大なりと

謂ふべし。

●東亞文書院の入學生 本道よりの入學生には

師範卒業の秋永勝、中學卒業の鈴木淳、并に犬飼

大助の三名なり。

●婦人協會北海道支部の例會 去る四月十二日

午後一時より札幌女子高等小學校にて例會を開け

り、炭鑛會社大島六郎及師範學校教諭熟田氏の講

話などありたり。

●北海の花信 春風漸く暖く、黃鳥既に花信

を報ずるも梅花未だ笑を呈せず、四月卅日雪の一

片二片落ち降るも、眞に北海の名に背かず、因に

記す本道の花候梅桃櫻杏など同時期に咲きて妙

なり。(五月中旬北海道通信生)



一金拾	錢	三十五年五月	木村寅惠
一金拾	錢	三十五年五月	高木なみ
一金拾	錢	三十五年四月	安東てい
一金拾	錢	三十五年六月	村井あい
一金拾	錢	三十五年五月	赤江よれ
一金二拾	錢	自三十五年十一月	重松あや子
一金壹圓二拾錢	錢	自三十五年十二月	西尾田鶴
一金壹圓拾	錢	自三十五年十二月	淺井馨
一金壹圓拾	錢	自三十五年十二月	永地待枝
一金五拾	錢	自三十五年五月	山中下枝
一金拾	錢	自三十五年五月	近木とし
一金二拾	錢	自三十五年六月	加納貞子
一金壹圓二拾錢	錢	自三十五年十二月	澤村きみゆ
一金七拾	錢	自三十五年十二月	河崎きよ

前號掲載

正誤

一金六拾	錢	自三十四年三月	淺岡はまハ
一金六拾	錢	自三十五年四月	淺岡はまノ誤

謹告!!

本誌號を重ねるに従ひ、益記事を精選し体裁を整へて本誌の改良を計らんと欲す。次號に於て既に定まれる記事左の如し。

- 日常の作法.....香園 女史
- 津崎矩子(完結).....下村三四吉
- 眼の話.....本郷 生
- 鐵道の話.....菊 亭
- 遊戲の方針.....町田則文
- 國學と荷田東瀛.....米 溪
- 人生の比喩.....小嶋松之助
- いろは料理.....石井泰次郎
- 母と子と繼母.....林 壽祐
- 米國に於ける我二人の女學生.....や て、
- 結婚論.....野 本 生
- お寺参りの婦人と子ども.....凸 凹 生
- 其他子供欄の話は、愈出で愈面白し。夏は漸く來らんとす。清流緑樹の邊り、希くは聊か消夏の友たるに足らんかな。